

# 保育者養成テキストからみる「楽しさ」に関する研究 —保育教材としての「手遊び」を中心に—

堀 建治      松本 亜香里      小杉 裕子  
(相山女学園大学)

## I. はじめに

我々は数年来、保育の場面における「楽しさ」とは何かについて、様々な見地から検討を重ねてきている。この数年は「手遊び」を主軸として、「楽しさ」とは何かを問い続けているところである。これまでも我々は子どもに「手遊び」が親しまれる事由を通じて、「手遊び」における「楽しさ」とは何かについて分析・検討を行った。その結果、子どもに好まれる「手遊び」は子どもの興味や関心に応じて「変化」するのが好まれる傾向にあることが明らかになった。「遊び」という観点から「手遊び」をみると、「遊び」は固定化されるのものではないし、多種多様な形が認められるものである。「手遊び」が身体表現やリズムを伴うなど、単なる歌唱活動や表現活動でない要因としてこの「変化」にあるという点に尽きることを指摘した。「手遊び」そのものが「変化」する、さらに「手遊び」の多様性が子どもへ「楽しさ」をもたらすのではないか、ということを結論として提起した<sup>(1)</sup>。

子どもが「楽しさ」を味わうきっかけとして、遊びが介在する。その「遊び」研究、すなわち、保育教材としての内容が当然、問われることとなる。これまでの我々の研究結果からも保育者が「遊び」を「楽しい」と感じているときは子どもも「楽しさ」を感じていることが明らかにされている<sup>(2)</sup>。本研究ではこれまで同様、「手遊び」を中心としつつ、「保育教材」の意義として「手遊び」が存在するかどうかを観点に「楽しさ」を検討することを企図するものであるが、本稿では「手遊び」が保育者養成校でどのような形で伝えられているかを、保育者養成校で使用されている教科書であるテキストを分析することにより、「手遊び」のもつ「楽しさ」を検討することをねらいとする。分析で利用するテキストは以下の方法で詳述するように、主に領域「表現」の「指導法」を扱ったものを利用する。岡本によると保育指導法とは、保育の仕方のことである。それは、幼児をどのように導くかという方法であり、保育方法と同義である。したがって保育指導法は、各幼稚園や保育所の保育方針と深く関連するものであり、さまざまな指導法があると指摘する<sup>(3)</sup>。いうまでもなく、「保育」という営みを通じて、子どもをどのように導いていくかを検討することは保育者の願いやねらいを考えるうえでも重要な事柄である。その指導法や保育方法を扱うテキストの編著者は保育者養成校の教員やその関連する学界の関係者によるものがほとんどであり、斯界で

の理念や思想が含まれているのが通例である。その点からも「手遊び」を保育者養成校教員や関係者がどのようにとらえているかを分析することで、「手遊び」における「楽しさ」とは何かを明らかにすることをねらいとする。

## Ⅱ．研究の方法

研究の方法について、主に文献研究を中心とする。分析対象とした文献は、主に保育者養成で使用されているテキストとし、以下のとおりとなっている。

- (1)今回は領域「表現」に的を絞って検討する。
- (2)テキストの内容として、主に「指導法」を中心として編集されているものを選択し、いわゆる保育教材が中心となったものは除外した。
- (3)書名として「保育内容表現」、「表現」、「音楽」、「身体表現」、「音楽表現」と標記されたものを選択する。
- (4)本稿で分析対象としたテキスト冊数は32冊である。
- (5)「手遊び」に関する理論や遊び紹介、実践をテキストの該当箇所を抽出して考察する。

研究の分担については、堀が全体的総括（考察・分析含む）を担当し、松本、小杉が資料収集と個別の考察を行う。

## Ⅲ．研究の結果及び考察

### 1. なぜ「手遊び」なのか

「楽しさ」を考える視点として本研究では「手遊び」を中心軸に据えるが、その理由は「手遊び」が前述のとおり子どもにとって人気のある「遊び」のひとつだからである。笠井らによると、手遊び歌といわれてきたのはいつ頃であったのか、「はっきりしない」とし、「手遊び歌は突然に歌われだしたわけではなく、そこには言葉があり、子どもの存在があり、生活があり、遊びがあり、音楽があり」と考えると「手遊び」は現代版「わらべうた」になるのではないかと指摘する<sup>(4)</sup>。つまり、「手遊び」は「わらべうた」同様、子どもの生活に根付いた、身近なものであり、さらに広い視点で生活の中で歌われた言葉や環境のものが、生活環境の変化、文化の変化に伴い、対応しやすいものとして残ったものとみるべきであると言及する。「手遊び」がどのように誕生したのか判然とはしないものの、子どもにとっては常に身近な遊びとして存在している。それゆえに人気の高い遊びとも言えるのである。

このように「手遊び」は子どもに人気のある一方で、保育者の視点として保育教材としての認識が乏しいこともこれまでの我々の成果から明らかにされている<sup>(5)</sup>。その要因として「手遊び」が優良な保育教材という視点ではなく、「場つなぎ」や「集中させるツール」との意識が未だに根強いためである。ではなぜ保育者は子どもが「楽し

い」と感じているはずの「手遊び」を保育者は「場つなぎ」という認識をもつに至るようになったのか。それは保育者が保育の専門職として育ってきた環境との相関が認められるのではないか。つまり、保育者養成校で「手遊び」がどのような形で伝えられてきたのかというところに起因するのではないかと推測される。その要因を解明するため、本稿は保育者が学生として保育者養成校に在籍時に用いられていると思われるテキストの分析から「手遊び」の意義を検討することを目的とする。「手遊び」がどのように扱われているかを考察することで、「手遊び」の意義を見出すことができるのではないかと推測される。

## 2. テキストからみる「手遊び」の扱い

本稿で分析対象となった文献は次頁の表のとおりである。書名及び著者、出版社等は、便宜上、記号化して表示している。「手遊び」はほぼ毎日、保育現場で実践されている遊びにもかかわらず、「手遊び」について扱われていないものが22冊中10冊である。扱われていたとしても、分量としては極めて少なく、9冊となっている。

ところで「手遊び」を扱っていないテキストの特徴として、領域「表現」を「遊び」のかかわりから総合的にとらえようと試みるものが多い。具体的な遊びの展開方法や指導法や、遊びの紹介というよりも、遊びそのものの理念や保育に対する方向性を解説したものが大半を占めている。さらに事例（エピソード）を含んでいることも多く、それらも多岐に互っている。紙面として「手遊び」の扱いが少ないものは例外なく「手遊び」を事例（エピソード）のひとつとして扱っている。さらに全体として「手遊び」以外に「〇〇遊び」のような固有的遊びの方法や遊びを紹介する記述内容も少ない。これはテキストの编者（あるいは筆者）が遊びを文字通り「総合的活動」として捉え、かつ発達の視点となる領域を前提条件として、事例（エピソード）として記述することを目途としているためである。確かに事例（エピソード）は鯨岡が強調するように、保育者が自らの実践を振り返る際のひとつの手段として有効である<sup>(6)</sup>。しかしながら「保育教材」そのものを分析する、あるいは「指導法」という視点からは事例（エピソード）から十分、「保育教材」のもつよさなり、特長が伝達・理解されにくいのではないかと考えられる。

その一方で、「手遊び」に多く紙面を割くテキストもみられる。それらテキストの傾向として、固有的遊びの紹介や具体的な遊び方を示す記述が多く、理念や概念的理解を促すものは極力最小限度にとどめられている。さらに楽譜や歌詞、具体的な展開方法が図で掲載されるなど、より具体的な記述となっていることが特徴的である。保育を学ぶ学生にとっては「遊び」のポケットが増えるため、「指導法」の観点からは有効であると思われるのだが、後述のような視点により、具体的な活動や遊びを提示することをためらう、あるいは忌避する傾向もあり、これが却って事例（エピソード）を利用することに拍車をかけているものと推察されるのである。

(表) 「手遊び」掲載頁				
書名	出版年	掲載頁数	総頁数	
A	1990	0	277	
B	1990	0	112	
C	1991	30	181	
D	1998	8	197	
E	2000	0	118	
F	2004	4	90	
F	2004	5	136	
G	2004	0	236	
H	2006	0	188	
I	2006	2	178	
J	2007	0	221	
K	2007	0	177	
L	2009	0	175	
M	2009	2	136	
N	2009	2	139	
O	2010	15	250	
P	2010	0	174	
Q	2010	0	159	
R	2014	20	169	
S	2014	4	222	
T	2014	2	185	
U	2015	2	108	

### 3. 「手遊び」に対する評価と意識

要するに、指導法としてどのような内容を学生に伝え、理解を求めていけばよいか。前述のように、それは2方向から捉えることができる。ひとつは事例（エピソード）から「遊び」そのものを大局的に扱い、そこから「遊び」の展開なり、指導方法を考えるものと、より具体的な遊びを歌詞ややり方を付して、多く紹介していくことで「遊び」の展開や指導法を考えるというものである。それらは編著者の方向性によって決定づけられるといっても過言ではない。これは「表現」に限ったことではなく、他の領域でのテキストでもみられるものと思われる。テキストの編著者が保育という営みに対して、どのような認識をもって臨んでいるかによって方向性が大きく変化するのである。

本研究の主軸である「手遊び」は保育者が抱く「場つなぎ」感を象徴するように、「手遊び」そのものが以下のような思いで保育者養成校の関係者は捉えられているのではないか。やや長くなるが、あるテキストからの文章を引用する<sup>6)</sup>。

「読み聞かせの前には必ず手遊び、早く読んでほしくて、子どもはすでに目を輝かせているので、“集中させるため”のお決まりの“導入”。…（中略）…子どもにとって本当の遊びは、自己を表出する自己表現活動である。大人が枠づけしない“名前のない遊び”のなかにこそ得られるものがあふれている。子どもが名づけたり意味づけたりするような、大人が見過ごしてしまいそうな心と身体の動きのあらわれを、保育者は支えていかななくてはならないのである」

その前段階での記述で、テキストでは保育実践例をその原因として、造形にせよ、音楽にせよ、「表現」にかかわる部分として技術や練習、それがさらには「上手・下手」という子どもへの評価に直結することと、「表現」の創造というプロセスや子どもの発達、意欲や興味とかけ離れていることに対する危惧を指摘する<sup>(4)</sup>。テキストから「手遊び」そのものを敢えて取り上げない理由が臆気ながらではあるものの、ここから看取される。

しかしながら、それは一面的かつ一方的な捉え方であると思われる。前述のように「手遊び」の紹介や歌詞、遊び方に多くの紙面を割いているものも多数みられる。その編著者としての確固たる思い（たとえば専門的知識・技術の修得）が込められており、何も「大人が考える」、「型にはめられた遊び」を子どもとするために記述されたのではないことを痛感する<sup>(7)</sup>。「隠れたカリキュラム」論が示すように、保育を教授する側が、「手遊び」そのものが保育教材として価値がないものとみなされている場合は、「手遊び」はいつまでも「場つなぎ」に甘んじなければならないであろう。ただし、指導法の内容として「手遊び」をどのような形で取り上げていくことが望まれるか、さらなる議論・検討の余地が残されている。

#### IV. まとめ

保育教材として現時点で取り上げた文献について示したが、さらに未収集の文献を加えることで、「手遊び」の保育教材としての意義を明らかにしていきたい。それが「手遊び」の「楽しさ」を考える重要なきっかけとなるからである。

#### 【付記】

本稿は第 72 回日本保育学会（2019 年 5 月）における発表原稿に加筆・修正を加えたものである。

#### 引用・参考文献

- (1)堀建治・松本亜香里・小杉裕子「「楽しさ」に関する基礎的研究（その 7）」（第 71 回日本保育学会、2018 年 5 月）
- (2)堀建治・松本亜香里「保育者養成校における「運動遊び」に関する研究（その 1）」

- (『鈴鹿短期大学紀要』第 32 巻、2012)
- (3)岡本雅子「保育指導法の歴史と今日的課題」(関西福祉科学大学総合福祉科学学会『総合福祉科学研究』第 6 号、2015) PP.35-36.
- (4)笠井キミ子・久原広幸・坂田万代・横山浩平「保育教育における手遊び歌についての一考察」(『中村学園大学・中村学園大学短期大学部 研究紀要』第 47 号、2015) PP.1-4.
- (5)堀建治・松本亜香里「「楽しさ」に関する基礎的研究 ―「手遊び」をてがかりとして―」(三重幼児教育文化研究会『幼児教育文化研究』第 3 号、2018)
- (6)鯨岡峻『エピソード記録で保育を描く』ミネルヴァ書房、2005
- (7)岸井勇雄他監修『保育・教育ネオシリーズ 19 保育内容・表現』同文書院、2006、PP.162-163.
- (8)木村鈴代編『新たな楽しい子どものうたあそび』同文書院、2014